

Personality and the American Presidency

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2018-04-30 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 浅川, 公紀 メールアドレス: 所属:
URL	https://mu.repo.nii.ac.jp/records/791

米大統領のパーソナリティ分析

- 一 はじめに
- 二 大統領の人柄の影響
- 三 バーバーの大統領分類
- 四 リンドン・ジョンソンの場合
- 五 リチャード・ニクソンの場合
- 六 フランクリン・ルーズベルトの場合
- 七 ロナルド・レーガンの場合
- 八 ジミー・カーターの場合
- 九 おわりに

浅川公紀

一 はじめに

大統領に求める行動規範と期待が大きいほど、大統領個人の個性や人柄が大統領の行動に反映される度合いは通常少なくなる。第四五代アメリカ合衆国大統領ドナルド・トランプの場合は、トランプのような個性、人柄の人物が大統領に選出されるといふ可能性は当初、低かった。大統領に就任した後も、トランプへの期待は通常の場合より低かったと言えよう。その分、トランプは個性、人柄を露骨に表現し、行動に移す傾向が強い。また米国民がトランプ派と反トランプ派に二分されており、米国民からのトランプへの期待も分極化され相矛盾する期待が寄せられている。それだけトランプは、国民の世論に影響されない立場に立っていると云っていい。

政府を構成する三権の中で、行政府の長である大統領が最も制約が少ない中で行動している。議会や最高裁の場合は先輩議員や判事が非公式の行動規範を維持しているが、大統領の場合は先輩などいない。その時々の大統領が期待を生み出している。憲法の規範や一般大衆の期待はあるが、それは極めておおまかなものである。議会、官僚機構、大衆、マスコミとの関係は、大統領自身が自分の裁量で作り出す部分が大きい。過去の大統領は全米国民向けのテレビ演説などで大衆と関係を結んだが、トランプは毎日のように発信するツイッターによって関係を結んでいる。ツイッターの内容は必ずしも政策の規範に規定されるものではなく、側近はツイッターを抑制しようとしてもできない現実がある。

トランプは、自分の行動を規制されたり枠にはめられることを極端に嫌う。大統領令への依存はその表れである。

二 大統領の人柄の影響

政治は生き物である。政治制度は合衆国憲法によって定められ、米大統領といえどもその枠をはみ出ることにはできない。しかし、法の許す範囲内で大統領は自分の好むスタイルで決定を行う。そのとき大統領の個々のパーソナリティが大きく影響する。つまり大統領の政策決定は大統領自身の人柄に左右される。そして誰が大統領に影響を及ぼすことができるか、誰の言葉が大統領の耳に入りやすいか、誰が大統領であるかが大きな問題となる。したがって民主的な政治制度の中で、米国の政治形態が最もパーソナリティ（人柄）という偶然性に依存する度合いが大きいといわれる^①。

どのようなときに大統領のパーソナリティが重要な問題になるのだろうか。個々の大統領の人柄が次のような条件下で重要な影響をもたらすことを、近年の調査は示唆している。

- 精通した問題解決の手掛りがないまったく新しい状況
- 手掛りが多すぎる複雑な状況
- さまざまな要素がさまざまな手掛かりを示唆する特異な状況
- 政策立案者特有の諸問題
- 政策立案者に大変な労力を要求する決議
- 個人的決定に対する制約が殆どない状況^②

大統領の人柄が政策に最大の影響を与えた具体例として、第一に問題が新たな協議事項となったケースである。人権政策に熱中したカーターや、戦略防衛構想（SDI）を擁護したレーガンがこのケースにあたる。第

二は、政権が初期段階から取り組んでいる問題のケースである。フォード前政権が積み残した第二次戦略兵器制限交渉（SALT II）に単なる決着をつけるのではなく、独自の条約交渉を行う決心をしたカーターがこのケースに相当する。ソマリアへのクリントンの対応もこの例にあたる。第三は、大統領自らが深く関わっている進行中の問題のケースである。ジョンソン、ニクソン両大統領にとつてのベトナムがまさにこのケースである。またレバノンの米国人人質解放がレーガンのそれであった。最後に、問題が危うい均衡状態にあるとき、大統領の人柄が重要になると思われる。このケースにあてはまる近年の事例は、軍備管理、中東和平交渉、ボスニア、ロシアの民主化運動などである。⁽³⁾

ジェームズ・バーバーは著書『大統領の人柄—ホワイトハウスでの行動の予測』の中で次のように述べている。⁽⁴⁾
 大統領のすべての政策決定物語は合理的人間が計算する表の上の話と、情緒的人間が感知する内面の話の二つの物語に他ならない。この二つの物語は永遠に連結している。

ここにみられる通り、大統領の決定は合理的な表の話と、大統領の人柄という情緒的・内面的な裏の話の二つででき上がっている。

したがって、大統領が自らの権限をどのようにみているかという大統領の人柄で、決定スタイルも大きく違ってくる。

三 バーバーの大統領分類

近年では、リンドン・ジョンソン、リチャード・ニクソンなどの大統領が心理分析の対象になり、その行動

バーバーの大統領 4 分類

	能動的	受動的
積極型	A	B
消極型	C	D

の一貫したパターンが研究分析の焦点になってきた。しかし大統領へのアクセスは限られているため、心理分析では家族や友人、伝記、手紙などに依存せざるをえない。また頑固さを心の不安定の表れと見るか、原則への忠実さと見るかといった解釈の問題もある。また幼少時代の経験が大統領の人柄に大きな影響を与えるが、青年時代、大人になってからの経験も無視できない。

ジェームズ・デビッド・バーバーの『大統領の人柄—ホワイトハウスでの行動の予測』、二〇世紀の一五人の大統領の人柄の分析は注目に値する。⁽⁵⁾ バーバーは個別の大統領の人格を分析し、分類し、それぞれの類型の人格形成要素も分析している。それによると、人柄は、人格、世界観、スタイルの三つの要素からなる。人格は一時的ではなく持続的な人生への姿勢である。人格はかなりの部分幼少期に形成され、三つの要素の中で最も重要である。世界観は青年期に形成される。スタイルは、レトリック、人間関係、課題に取り組む方法である。スタイルは、ニーズ、技能、機会により左右される。人格、世界観、スタイルがどう大統領の行動に影響するかは、力関係（権力状況）と大衆の期待によっても左右される。人柄の種類は、物事への取り組みで能動的か受動的か、自分の行いに対して積極型か消極型か、すなわち肯定的か否定的か、または楽観的か悲観的かによっても影響を受ける。

二〇世紀の大統領のうち、A 能動的で肯定的または楽観的（自信家で行動の機会を作り出し、権力の行使を楽しむ、落ち込まない）だったのは、フランクリン・ルーズベルト、ハリー・トルーマン、ジョン・ケネディ、ジェラルド・フォード、ジミー・カーター、ジョージ・ブッシュ、B 能動的で否定的または悲観的（物事に多大のエネルギーを投入するがそこ

から喜びを余り感じない、深い不安感、失敗にこだわり落ち込む、自尊心が低い) だったのは、ウッドロー・ウィルソン、ハーバート・フーバー、リンドン・ジョンソン、リチャード・ニクソン、C受動的で肯定的または楽観的(順応的で、自尊心が低い)、迎合的態度でそれを補う、決然と行動することに躊躇) だったのは、ウィリアム・タフト、ワレーン・ハーディング、ロナルド・レーガン、D受動的で否定的または悲観的(意欲的でなく義務感から政治を行う、自尊心が低い)が他への奉仕でそれを補う、対立と不確定さを回避、原則と手続きを強調) だったのは、カルビン・クーリッジ、ドワイト・アイゼンハワーである。⁽⁶⁾ これらは大まかな分類で、その類型にきっちり当てはまるわけではなく、その傾向があるということである。能動的で肯定的な大統領は、大統領職の責任と圧力の中で成功する可能性が最も高く、能動的で否定的な大統領は大統領職に損害を与える可能性が最も高い。

四 リンドン・ジョンソンの場合

リンドン・ジョンソンの政権の問題の多くは、能動的・悲観的な人柄、とくに深い不安感に起因していた。ジョンソンの父親は三度破産し、ジョンソンは経済的に厳しい貧しい少年時代を送った。ジョンソンは靴磨きもして金を稼がねばならなかった。⁽⁷⁾ 母親は教養があり知性的で、教育ママだった。ジョンソンは母親に情緒的に依存していた。母親はジョンソンが学業に励みいい成績を収めると彼を溺愛し、学業を怠ると冷遇した。⁽⁸⁾ ジョンソンは稼ぎが少なく酒飲みの父親が母親を苦しめるのを見て育った。また父親は息子が臆病者で男らしくないといつも批判していた。このため、ジョンソンは父親と疎遠だった。ジョンソンは父親の前で男らしさ

を見せようと殊更努めた。少年時代のジョンソンの両親との関係は緊張していた。ジョンソンは業績を追求することにより自分の価値を証明しようとした。大学時代、ジョンソンは用務員や学長の補佐をアルバイトでこなし、大学の新聞の編集者になり、優秀な成績で卒業した。ジョンソンが政治家になることを志したのも、母親の愛情を獲得し、父親の尊敬を得る動機からだった。政治家は男らしい仕事だと感じ、両親が政治に関心があり父親は地元の政治に関与し、母方の祖父も政治に関わっていたことも要因になった。自尊心が低かっただけに、他人から愛と尊敬を求める願望も強く、他人の拍手喝采を浴びることを求めた。半面、失敗と拒絶を極度に恐れた。⁽⁹⁾

ジョンソンの世界観とスタイルは主に議員時代に形成された。自身の少年時代の貧困から恵まれない人々への思いやり、極貧のメキシコ系米国人を教えた経験、フランクリン・ルーズベルトからの影響が、世界観形成の要因になった。また第二次世界大戦の経験から侵略に対してはすぐに正面から戦いを挑むべきだという教訓を得た。⁽¹⁰⁾ジョンソンは議会で急速に頭角を現し、民主党の上院院内総務として独自のスタイルを身に付け、立法手順と政策の内容をマスターした。ジョンソンは人の動機、欲求、強み、弱みを見抜き、それを目的達成のために利用することに長けていた。またジョンソンは秘密主義で、政策に関するコンセンサス醸成に熱意を持ち、側近には絶対的な忠誠心を要求した。

ジョンソンは大統領在任中、業績により自分の価値を証明しようとする性向を反映し、業績を求め、かつてないほどの数の法案を立法のために議会に提出した。業績には支配力が必要で、ジョンソンは支配力を失うことを極端に恐れ、管理に執着した。ジョンソンはホワイトハウスで、大きなことから細かいことまで管理しようとした。閣僚にもスタッフにも完全な忠誠と従順を要求した。閣僚やスタッフの人事においても忠誠心を第

一に考えた。ベトナム戦争の最中に、ジョンソンの忠誠心、秘密性、コンセンサスへの執着は率直な議論を抑制し、側近もジョンソンが開きたいと思うようなことしか報告しなくなった。また秘密保護のためジョンソンはごく僅かな側近としか協議しなかった。ジョンソンは失敗を恐れる余り、目的達成のためには手段を選ばない傾向を強めた。一九六四年大統領選でジョンソンは当選のため連邦捜査局(FBI)捜査官を過激派に関する情報収集の名目で民主党大会に送り、政敵についての情報を集めさせた。目的のために手段を選ばないジョンソンは、平気で真実を捻じ曲げた。ジョンソンはドミニカ共和国に共産化を防ぐために二万二〇〇〇人の米軍部隊を派遣したが、それを正当化するため米国民の生命が危険に曝されていたと嘘を言った。

ジョンソンの主要な業績は偉大な社会政策に代表される福祉社会の実現だったが、ベトナム戦争によりその業績が脅かされるのを恐れた。戦争遂行費用が上昇する場合、議会が福祉政策の予算を削ることを恐れた。ジョンソンは一九六七年のベトナム戦争費用が一七〇億ドルに達するという報告を国防長官から受けていたが、議会には一〇〇億ドルしかかからないと報告した。実際には戦費は二一〇億ドル近くになり、議会は増税を考え、インフレが高進した。またジョンソンはマクナマラ国防長官の現地視察に基づく勧告に従って一〇万人の米軍部隊増派を決定したが、米国民の反対を恐れ増派規模を五万人と説明した。⁽¹⁾ジョンソンの過ちを認めようとしないう柔軟性を欠く頑固さと自分の不満を他人に吐き出す性向は、ベトナム戦争への対応でマイナスに働いた。一〇万人の増派にもかかわらず戦争は行き詰まり、戦争が米国民の人命、経済、心理に大打撃をもたらしていたにもかかわらず、ジョンソンは戦争遂行を継続した。戦争を停止し後退することは臆病であり男らしさを欠くように思われた。ジョンソンは批判を恐れて、北ベトナムへの爆撃拡大、戦争拡大を進めた。ベトナム戦争が泥沼化し国内で反戦運動が強まるにつれ、ジョンソンはケネディを支持する東部エスタブリッシュ

メント、マスコミ、議会の政敵に批判の矛先を向け責任転嫁した。ジョンソンは偏執狂的になってゆき、自分を批判するマスコミや政敵、スタッフまでもソ連、共産主義の陰謀により操られ、影響を受けていると考えた。

一九六八年にようやく、北爆のエスカレートによって北ベトナムは交渉に応じることはないことを悟り、北爆を停止した。こうした政策転換は客観的に見てジョンソンがそれまでの政策の誤りを認めることを意味したが、ジョンソンはそうは考えず、米国民が自分を敬愛し続けていると信じていた。ただジョンソンは再選を求めないことを発表した⁽¹²⁾が、これは米国民に選挙で拒絶されるのを恐れた結果と見られる。

五 リチャード・ニクソンの場合

リチャード・ニクソンも能動的・悲観的な人柄の代表である。ニクソンもジョンソンと同じく、貧困な家庭に育ち、少年時代は体も弱く頻繁に病気になる⁽¹²⁾。父親はニクソンが模範にするには程遠い人物で、仕事で何をやっても失敗し、短気で子供たちによく暴力をふるった。ニクソンは母親を聖人のような女性として愛し、情緒的に母親に近く依存していた。しかし母親は結核になった息子の一人と療養のためにアリゾナ州に二年間暮らすなど離れていることが多かったため、ニクソンは愛されたいと願いながらも十分な愛情を受けられなかった。ニクソンの兄弟二人が結核で死亡するなど、家庭環境では恵まれなかった。母親のそばで家事の手伝いをし、体が弱かったこともあって、自分は男らしさが足りないのではないかと不安を抱いた。ニクソンは自尊心が低く、いつも心も不安を抱えていた。ニクソンは自尊心の低さを補い、自分の価値を証明するため、勉

学その他で懸命に努力し、大学では学生会長になり、ロースクールをクラスで三位の成績で卒業した。競争心が強く、体の弱さを弁舌で補い、弁論で卓越した。大学時代学生会長になったが友達は余りできなかった。真面目だがユーモアや社交性を欠き、内気で孤独な性格だった。

ニクソンはカリフォルニアの友人から薦められて、連邦議会の下院選に出馬した。政治は極めて外向的な世界だったが、ニクソンは内気な性格だった。半面、ニクソンは人から価値を認められ敬愛されたいという深い心理的ニーズを抱えており、政治的な挑戦を克服することに成功することとそのニーズを満たすことを覚えた。ニクソンは人生、とくに政治を自分を試す闘争と考え、勝つことに執着した。挑戦に直面し克服することに喜びを感じることはなく、困難だが、正しい決定をすることにこだわった。¹³⁾

ニクソンの世界観はその時々状況に適応して変化した。ただ中核においては、強い反共主義と他人を信用しない悲観論が柱になった。ニクソンのスタイルの特徴は、弁舌力（レトリック）、秘密主義、全てをコントロールしようとする性向などである。これは失敗を避けることへの執着に起因している。全てをコントロールする性向は、情報を厳格に統制し、情報をごく僅かな人間にしか共有しないスタイルを生んだ。また自分が危険な敵対的世界に生きているという意識から、周りに対して強硬な態度を維持し、敵対的に対応する性向がある。これらは目的のためには手段を選ばない態度になってゆく。ニクソンの内向的で懐疑的な性格は、人との接触を極力避けるスタイルにつながった。

こうした性向は、ニクソンの政治的キャリアを通して、選挙キャンペーンの全てで対立候補に対して極めて攻撃的に対応するスタイルを生んだ。とくに大統領に就任してから、ニクソンの性向は統治のスタイルに如実に反映された。ニクソンは自分の周りに壁を構築すると言っていたが、大統領として、直接のアクセスを与え

たのは、ハルデマン、ジョン・エーリックマン、キッシンジャーだけだった。ニクソンの隠遁的性格は大統領になって一層顕著になり、一種の強迫観念にとりつかれた。

一九七二年春には、大統領選で民主党のエドムンド・マスキー候補と僅差にまで追い上げられていた状況だった。ここでニクソンの再選を果たすという目的のためには手段を選ばないという性向が行動に移されてゆくことになる。大統領再選委員会（C R E E P）は、民主党候補の選対組織にスパイを送り込んだり、対立候補を陥れるため偽情報をばらまいたりするような活動を進めてゆく。また連邦捜査局（F B I）や司法省などの政府のリソースを、民主党候補の私生活のスクランダルを調べたりするために活用した。これらの活動にニクソン自身が直接関与していたかどうかは別としても、ニクソンの性向、スタイルはC R E E Pにこうした非合法的活動を奨励する環境を生み出した。ホワイトハウスの配管工を自称するチームは民主党全国委員会本部に不法侵入して、盗聴器を仕掛けようとして、その活動が発覚し、ウォーターゲート事件の発端になった。

やがてウォーターゲート事件に対する独立検察官による調査が進み、大統領自身の関与を示す証拠が徐々に明らかになっていった。能動的・悲観的な人柄の特徴の一つは、柔軟性のなさ、頑固さであり、とくに失敗の可能性が強まり自分が脆弱な立場に置かれると柔軟性を失う。⁽¹⁾これがウォーターゲート事件でのマイナスに働いた。ニクソンは外交政策では、強固な反共主義者であるにもかかわらず、中国、ロシアとのデタント（緊張緩和）を推進し、中国との国交を樹立するなど柔軟さを見せた。しかし自分のスクランダルが政策面での業績を脅かすようになると、ニクソンは頑なになった。反論のしようがないような状況になっても、ニクソンは最後の最後まで自分の過ちを認めようとせず、自分を引きずり落そうとする政敵による陰謀の犠牲者として自分を考え、政敵を批判した。独立検察官のアーチボルド・コックスを解任し、エリオット・リチャードソン司法長官が

辞任し、米議会下院司法委員会が大統領に対する弾劾調査を開始し、上院でウォーターゲート事件の公聴会が開かれるに至っても、ニクソンは自分の事件の内容、隠ぺい工作への関与を否定する態度を変えなかった。

ニクソンは結局、辞任に追いやられたが、辞任演説でも議会でもはや十分な支持を得ることができなくなつたという辞任の理由を述べたものの、一連の不法行為への関与での過ちを認めることはしなかった。辞任後の大統領恩赦に関するコメントやその後のインタビューでも、自分の判断力の不足には言及したものの、罪を認めることをしなかった。もしもニクソンが能動的・悲観的な人柄からくる性向、スタイルを頑固に継続することをしなかったなら、あるいはもっと多くの側近と協議していたら、弾劾手続きや辞任といった事態を回避できたかもしれない。

ウォーターゲート事件はニクソンの性向、人柄が大きき要因になった。それが米国の大統領職の歴史に権力の濫用、司法妨害、政府機能の麻痺という歴史的な汚点を残し、米国民の政府、大統領への見方にも否定的結果を生み出した。ウォーターゲート事件がなければ、ニクソンの政策、とくに外交政策は洞察と創造性に満ちた政策と業績が高く評価されたはずだが、ニクソンの不安を抱えた性向と行動はその業績を打ち消してしまつた。

六 フランクリン・ルーズベルトの場合

フランクリン・ルーズベルトは、能動的・樂觀的な人柄の大統領の典型である。ルーズベルトはジョンソンやニクソンと違い、平穩で恵まれた少年時代を過ごした。裕福な特権階級に生まれ育ち、豪邸に住み物質的に

不自由な少年時代を送っただけでなく、一人っ子として父親と母親の両方から愛情を注がれて成長した。父親は一見厳格だったが、フランクリンとボートや水泳、狩猟、乗馬などを一緒にして過ごし、父子関係も近かった。かといって両親が息子を放任に育てたわけではなく、息子を理解し節度のある人間として育てた。このためルーズベルトは外の世界に出ていった時にも、自信に満ち楽天的な考え方をしていた。ルーズベルトは学校、社会に容易に適応し、その人間的魅力と社交的性格のゆえに友達にも不自由しなかった。ハーバード大学では運動種目など多様な活動に参加し、社交クラブの役員を務め、「ハーバード・クリムソン」紙の編集長に選任された。ジョンソン、ニクソンの場合は大学の最も格式の高いクラブへの入会を拒否された失望を受け入れることができず別のクラブを作った。ルーズベルトも大学の最も格式が高いクラブへの入会を拒否されたが、自尊心が高かった彼はその事実を受け入れ余り気に留めなかった。

ジョンソン、ニクソンの場合、自分の心の不安を埋めるために権力を求めた。ルーズベルトは自分に自信を持っており、自然の成り行きとして政治の権力を求めた。また政府は社交的なルーズベルトの性格に合っていた。ルーズベルトの両親は特権階級として社会的慈善活動を行い、息子にも恵まれない者への奉仕の責任を重視するノブレス・オブリージュを教え込んだ。ルーズベルトに多大な影響を与えた寄宿学校の校長も、キリスト教の価値観と奉仕の生き方を教育した。⁽¹⁵⁾ こうした背景からルーズベルトは、公的奉仕を重要視する世界観を育み、その世界観は政治につながった。失敗を回避する執着心から政治を選んだジョンソン、ニクソンと異なり、ルーズベルトは嬉しい期待感をもって政治を選んだ。⁽¹⁶⁾ ルーズベルトは四年間のニューヨークでの弁護士生活の後、ニューヨーク州議会下院議員に出馬し、当選した。その後、海軍次官補になり、軍の官僚機構の統制に自信と意欲を持って取り組んだ。この時代にルーズベルトの政治スタイルが形成された。問題の詳細を注意

深く調べ把握し、解決した。彼は行動の人だった。彼はそのための情報を人との頻繁な接触により入手した。ルーズベルトは頻繁な対話を通して、学び、また他人を説得した。ルーズベルトはニューヨーク州知事として共和党主導の州議会を動かすために州民に政策を直接訴えて支持を得た。このプロセスで彼は聴衆に平均的市民に分かりやすい言葉で思いやりと共感を伝える弁舌力を磨いた。

一九三三年は米国がかつてない経済危機に直面していた時期だった。ルーズベルトはその年に大統領に就任し、自信をもって危機に臨んだ。大統領になってから、ルーズベルトは一〇〇人くらいのスタッフや政府当局者に大統領への電話による直接のアクセスを与え、傑出した官僚をオフィスに呼んで色々な課題について幅広く意見を聞いた。ルーズベルトは積極的に人から情報を入手し、またスタッフにも社会の現場に出て行って政策遂行の結果や現状などの情報を得るよう奨励した。彼はこうした幅広く集めた情報を基に政策的決定を下したが、ぎりぎりまでオプションをオープンにし、議論を尽くした。大統領の執務室には人の出入りが絶えず、議員とも頻繁に会合し、週に二回はマスコミ関係者との会見を持つて質問を受けるだけでなく質問もした。また政策決定を下す前に、事前に議会や国民が決定を受け入れるよう根回しし、説得した。議会でなかなか支持を得ることができない場合は、炉端談話で国民に直接話しかけ、説得した。議会や国民への説得では、ルーズベルトの一对一のスムーズな対話、人間関係を構築する能力と大衆に対する弁舌力を駆使した。ルーズベルト就任後の一〇〇日間には、数多くの法案を提出し、成立させた。米国史上に後にも先にも類例を見ない生産的な立法の成果を上げた。ルーズベルトは一九三六年には地滑りのな庄勝で再選を成し遂げ、一層の自信をもって行政を取り仕切った。

ルーズベルトは大統領として、議会との良好な関係を構築し、国民の幅広い支持を得た。これはルーズベル

トの自信と自尊心に裏付けられた能動的かつ樂觀的な人柄に負うところが大きい。ただ一つの難点では、保守派判事が主導する連邦最高裁判所との関係で、最高裁は議会が承認したルーズベルトのニューディール計画の主要な法律を憲法違反と判決して、その実行を阻害した。ルーズベルトは、連邦最高裁の判事で七〇歳に達し退職をしない判事の人数と同じ数だけ大統領が判事を追加で指名できるという法案を提案し通そうとした。この法案は最高裁の効率を高めるという名目で出されたが、見え透いた口実として批判され、議会と国民から反発を買った。結局法案は成立しなかったが、これはルーズベルトが自分の持前のスタイルを実行しない結果だった。しかしルーズベルトはこうした躓きも気に留めず、落ち込むこともなく、新たな課題に前向きに取り込んでいった。

七 ロナルド・レーガンの場合

二〇世紀において成功した大統領のもう一つの例は、ロナルド・レーガンである。レーガンは受動的・樂觀的な人柄で、同意と協調を進めその報奨として敬愛を求めるスタイルが特徴だった。⁽¹⁷⁾

レーガンの幼年、少年時代は、とくに極貧でも裕福でもなく、貧しくてもそれを貧しいとは感じなかった。多くの幸福な思い出に満ちていた。⁽¹⁸⁾ 父親は酒のみだったが、母親は父親の酒癖を同情に値する一緒の病気と考えるよう子供たちに教えた。母親は常に楽天的な態度を絶やさず、レーガンにも人生を大局的に楽天的に取り組むよう奨励した。持ち前の親しみやすい性格に助けられ、レーガンは高校時代にはフットボールのチームの主将、大学では学生会の役員、会長を務め、スポーツやドラマでも活躍した。学生時代は友達も多く、みんな

に好かれる人気者だった。ユーレカ大学で、大学側が経済難を理由に教職員を減らし、コースの数を減らそうとした時に、教職員、学生から反対が巻き起こった。レーガンは一年生を代表してキャンパス・ストライキ委員会委員に選ばれた。教職員と学生がストを決定する集会での演説にレーガンが選ばれ、その演説は拍手喝采を浴びた。この演説で、レーガンは自分の弁舌の才能と大衆を動かす喜びに目覚めた。それがラジオのスポーツ番組のキャスター、俳優への道につながった。

家族の大恐慌の経験から、レーガンはルーズベルトの支持者になり、ニューデイルの価値観を推進した民衆的行動のための米国民連合（AD A）のカリフォルニア支部設立を助けた。レーガンは米国映画俳優組合に加入したが、組合への共産主義の浸透と闘う経験を通して反共主義志向を強めていった。レーガンはその後、活動的な大きな政府、労組を捨て、一九四七年の保守的な家柄出のナンシー・デービスとの再婚を契機に共和党サークルで交友を広げるようになった。彼はジェネラル・エレクトリック社（GE）の広報関係の仕事をする中で、親企業、反政府の考え方に傾倒するようになった。このレーガンの世界観形成は多分に環境的なもので、レーガンの周りに受け入れられようとする受け身の人柄からきている。¹⁹

レーガンの政治スタイルはカリフォルニア州知事選出馬、知事時代に鮮明になっていった。一九六四年のパリー・ゴルドウオーターの大統領選キャンペーンを助けることを通して、レーガンは共和党保守主義哲学の雄弁な代弁者として全国的に知られるようになった。レーガンは国内では一般国民の社会的、経済的生活への政府の介入が諸悪の根源と考えるようになり、海外ではソ連の共産主義が世界の政治的不安定の原因であり、米国はソ連との存立をかけた闘争をしているという見方を確立してゆく。レーガンは知事選、大統領選では、自分から選挙戦を開始したというよりキャンペーン・マネージャーや後援者に選挙計画立案、戦略を含む選挙

戦を委任し、当選後も政権移行には殆ど関与しなかった。知事として政策決定や実行においても、側近に権限を委任するというのがレーガンのスタイルだった。俳優がシナリオライターの筋書と監督の指示を待つて、それに基づいて演技を行うように、レーガンの統治スタイルもそれに似ていた。しかし自分の信念に合致する政策に関しては、積極的に主張し関与した。⁽²⁰⁾

レーガン大統領の一日は九時過ぎからの執務室での国家安全保障担当補佐官によるブリーフィングで始まり、午後四時には執務室から退散するという緩やかなスケジュールが普通だった。権限の委任は通常は部下に責任を与え、指示を出し、定期的に進捗を報告させるとというのが普通だが、レーガンの場合は殆ど指示も出さないことが多かった。大まかなレトリックからあとは部下にやるべきことを推測させた。統治の細かい内容については、部下にリードさせた。⁽²¹⁾このことは、政権内の意見の対立が長引き、政策の一貫性がないような印象を与えたマイナス面もあった。国務長官と国防長官が、レバノンでの米軍駐留、テロとの戦い、中米政策、ソ連との交渉などの政策をめくり、五年間にわたり対立しあったこともあった。情報に基づく正しい意思決定には、正確な情報と堅固な助言が前提となる。積極的に情報を収集しないレーガンの受け身の姿勢は、正確な情報や助言を得ることができないリスクを伴った。イランの米国人人質を解放するためにイランに武器を売却する決定はのちに政権を揺るがすスキャンダルになったが、正確な情報、助言を決定に際して得ることができなかった例である。

レーガンは統治スタイルで、部下の閣僚やスタッフに権限を委任しただけでなく、政策や課題の詳細には無知で、就任後最初の二年間にマスコミその他への発言で事実関係において三〇〇以上の間違いを犯した。⁽²²⁾レーガンはマスコミや一般国民への演説などでは、ハンドラー、マネージャーに依存した。これは一般的な傾向で

あつて、レーガンが信念を持っていなかったということではない。レーガンは減税、国防支出増額、戦略防衛構想（SDI）推進、ニカラグア反政府勢力支援、イランへの武器売却、レイキャビクでの米ソ首脳会談での戦略兵器削減交渉などには強固な信念を持っており、こうした課題には積極的に取り組み、関与した。こうした課題では、周りの助言を退けて勇氣ある決断をすることが多かった。またレーガンは大統領職の責務を果たすことを楽しんだ。レーガンは、米国の過去と未来について、常に樂觀的な見方をしていたし、演説でも頻繁にその見方を表明した。受動的・樂觀的な人柄は自尊心が低い場合が多いが、レーガンはこの点では異なっており、いつも自分のあり方に満足し自信を持っていた⁽²⁵⁾。レーガンは自分への疑いに悩むことはなく、自分の直感を信じ、それに従つて驚くような成功を達成した。自分の短所についても軽く笑つて冗談にするユーモアがあった。周りを威嚇して自分のエゴを膨らませるようなことはなく、レーガンが公でもプライベートでも友人に対しても敵対者に対しても接する人にいつも愛想が良かった。人に憎悪や復讐心を抱いたり、恨みに思つたりすることもなかった。総じて、レーガンは二〇世紀後半における米大統領として最も成功した一人であり、偉大な大統領と見なされているが、それはレーガンの信念と人柄が大きな要因になっている。

八 ジミー・カーターの場合

大統領としての成功に必要な資質の一つは、積極的に行動の機会を作り出す能動性である。米国が国際舞台で指導的国家になり、国内では医療、麻薬、犯罪、環境など多くの複雑な課題を抱えている現在においてはそうである。また悲觀的な性向よりも樂觀的な性向をもつ人物の方が、大統領には相応しい。樂觀主義者は大統

領の責務を楽しんで果たすが、悲観主義者はそうではない。楽しまない理由は、自分自身の心の不安、疑い、敵対的環境への恐れなどにある場合が多い。能動的・楽観的な人柄は自尊心が高く、能動的・悲観的な人柄は自尊心が低い。後者は自己の価値を証明するために懸命に努力するといういい側面もあるが、失敗の回避に執着する余り目的のためには手段を選ばないというメンタリティーを生み、大変な過ちを犯してしまうリスクの方が大きい。また他人とのやり取りを楽しみ、効果的に他人と接する対人関係の資質も、大統領としてプラスの資質である。大統領としての成功は、相手を説得する能力、意思疎通能力にかなりの部分依存している。この資質は決定に必要な正確な情報収集でも有利である。人間関係を嫌う傾向は人を疑うことにつながり、それは過剰な秘密主義につながる。過剰な秘密主義は、助言する人の数の制限となり、正しい決定にマイナスである。大統領に相応しい資質の殆どは、能動的・楽観的な人柄からくる資質である。

ただ能動的・楽観的な人柄が、大統領としての成功を自動的に保証するとは限らない。ジミー・カーターは能動的・楽観的の例だが、大統領としては成功しなかった。カーターは歴代大統領の中でも長時間働き、政策の詳細を勉強して習得した。またカーターは自分の能力に自信を持ち、大統領職を楽しみ、意欲を持って取り組んだ。しかしワシントンのエスタブリッシュメントも米国民も、カーターは大統領としての職務をマスターすることに失敗したという低い評価を下している。その原因は、カーターの経験不足、とくに連邦政府の経験のなさ、ワシントンの力関係への無知、自分と同じく連邦政府の経験と知識を欠く側近、政治感覚の乏しき、政策の優先順位への認識の欠如、意思疎通力（説得力）の乏しき、弁舌力の乏しき、議会やマスコミや官僚にオープンに対した半面非常に内向的で内気な性格だったこと（親近感を感じさせない性格）、などだった。⁽²⁾

ウッドロー・ウィルソンのように、自尊心は低かったが、道徳的信念のゆえに目的のために手段を選ばない

誘惑を克服し、業績を成した例もある。逆に、ジョン・F・ケネディのように自尊心は高かったが、一九六二年の鉄鋼会社の価格引き上げに対して目的のために手段を選ばないような強硬手段を講じた例もある。

トランプの場合、能動性の資質はあるが、正確な情報を積極的に求め、助言を仰ぐという側面は欠如しており、政策決定で過ちを犯すリスクが高い。能動的大統領は、余りに多くのことを余りに性急に達成しようとすることによるリスクもあり、カーターの一期目にはそのリスクがはつきりとした形で現れたし、トランプの場合もそうしたリスクを持っている。このリスクに対しては、議会が抑制と均衡の原則に基づいて、リスクを軽減する立場に立つ。

九 おわりに

過去には、大統領の就任演説や選挙演説の内容をもとに、大統領の権力と業績を定量的に予測する研究がなされた。⁽²⁵⁾これは大統領の性格、人柄をもとに大統領の業績を予測する試みの一種である。しかし大統領の演説は多くの場合スピーチライターが準備し、大統領自身が書くとは限らない。また選挙演説を大統領が実行するとは限らない。一九四八年には、ハロルド・ラスウェルが、国家人事評価委員会を設置して、心理分析を通して候補者の中から「非破壊的で純粹に民主的な人格」の持ち主を選ぶという提案をした。⁽²⁶⁾しかし委員会から否定的判断を下された候補は政治的に大きな打撃を受けることを考えると、こうした判断を下す委員に誰が就くかは大きな問題である。また大統領職に就いた時の性向や行動を予測するのは至難である。候補者が審査の傾向と対策を準備し、こうした審査プロセス自体が損なわれる危険がある。

それよりも、候補者の過去を分析し、心理歴史学的アプローチで候補者が大統領になった場合の行動を予測し評価する方がより妥当だが、それも限界がある。人柄は、人格、世界観、スタイルから構成されるが、最も重要なのは人格であり、人格は幼少年時代に形成される。候補者の幼少年時代を調査することは人格の評価の目安になるが、幼少年時代の経歴を裏付ける証拠は乏しい場合が多く、証拠の入手は困難である。また心理歴史学的な所見を得ること、それを実際の選挙活動中の候補者に適用することは別問題である。また数多くの候補者が立候補している場合は尚更である。入手することがより容易な候補者の政治家としての公的キャリア全体に焦点を当てて候補者を判断した方がいいという見方もある。ただ候補者によっては、大統領選出馬までに二〇年以上の政治家キャリアがあつたニクソンのような場合と、政治家キャリアが極めて短いオバマのような場合もある。長いキャリアの場合は、判断材料をより多く入手できるが、そこから個人の人格、人柄を正確に割り出すことは容易ではない。とはいえ、候補者の政治家としてのキャリアの分析が最も参考になる可能性が高いと思われる。

(了)

(Endnotes)

- (1) Beloff, Max, *Foreign Policy and the Democratic Process*, Johns Hopkins Press, 1965, p.67.
- (2) Greenstein, Fred I., *Personality and Politics*, Markham, 1969, pp.50-61.
- (3) Hastedt, Glenn P., *American Foreign Policy: Past, Present, Future*, 3rd ed., Prentice-Hall, 1988, pp.180, 181.
- (4) Barber, James D., *The Presidential Character: Predicting Performance in the White House*, 2nd ed., Prentice-Hall,

1972. p.7.

- (5) *Ibid.*, pp.7, 8, 445.
- (6) *Ibid.*, pp.12, 13, 95-97, 146, 172, 174, 206, 210, 211.
- (7) *Ibid.*, pp.129, 130.
- (8) Kearns, Doris, *Lyndon Johnson and the American Dream*, Harper & Row, 1976.
- (9) Mooney, Booth, *LEJ: An Irreverent Chronicle*, Crowell, 1976.
- (10) Johnson, Lyndon, *The Vantage Point*, Holt, Rinehart and Winston, 1971, pp.46, 47.
- (11) Halberstam, David, *The Best and the Brightest*, Random House, 1969, pp.727, 736-738.
- (12) Abrahamson, David, *Nixon vs. Nixon*, Hill and Wang, 1976.
- (13) *New York Times*, October 27, 1973, p.14.
- (14) Barber, *op. cit.*, p.387.
- (15) *Ibid.*, p.218.
- (16) *Ibid.*, pp.225-230.
- (17) *Washington Post*, Special Supplement, Inauguration81, January 20, 1981, p.8.
- (18) Cannon, Lou, *Reagan*, Putnam, 1982.
- (19) Barber, James D., *The Presidential Character: Predicting Performance in the White House*, 3rd ed., Prentice-Hall, 1985, p.472.
- (20) Dallek, Robert, *Ronald Reagan: The Politic of Symbolism*, Harvard University Press, 1984.
- (21) Mayer, Jane and Doyle McManus, *Landslide*, Houghton Mifflin, 1988, pp.27, 28.
- (22) Green, Mark and Gail MacColl, *There He Goes Again: Ronald Reagan's Reign of Error*, Pantheon Books, 1983.

- (23) Barber, *op. cit.*, 3rd ed, p.9.
- (24) Mazlish, Bruce and Edwin Diamond, *Jimmy Carter: An Interpretive Biography*, Simon & Schuster, 1979, p.248.
- (25) Donley, Richard and David Winter, Measuring the Motives of Public Figures at a Distance: An Exploratory Study of American Presidents, in *Behavioral Science*, Vol.15, May 1970, pp.227-236.
- (26) Elms, Alan, *Personality in Politics*, Harcourt Brace Jovanovich, 1976, p.174.